# 保育者養成における表現領域のオンライン化の授業デザイン
## ―インプロ（即興演劇）の実践から得た学びを活かして―

直井玲子

〔キーワード〕インプロ（即興演劇），オンライン授業，表現，授業デザイン

## はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界中に猛威を振るい，2020年9月現在，世界で3000万人を超える感染者と90万人を超える死者が確認されているが，未だに終息の形が見えてこない。COVID-19の感染拡大を防ぐためにまずは2020年3月2日から幼稚園から高校までの学校で休校措置が取られた。同時に大学でも感染拡大を防ぐために大学構内への出入りが制限され，筆者が勤める青山学院女子短期大学でも2020年度の授業は原則オンラインで行うことになった。

筆者は青山学院女子短期大学子ども学科において，演劇やワークショップなどの表現領域の授業を担当している。子どもと保育者とが共に主体的に保育という営みに参加していけることを目指し，保育者養成の授業で表現領域を実践的に教える仕事に，筆者は自信と誇りを持っていた。しかし，オンライン授業という，学生と教員とが同じ空間において対面での授業ができずに，直接のコミュニケーションをとることができないということは，表現領域，特に演劇表現を専門にしている筆者にとって，自分のアイデンティティの根幹を揺るがされるようなショックを感じながらの授業準備及び授業実践を行わねばならないということでもあった。

本稿の目的は，保育者養成校における表現領域の授業のオンライン化によって生じた課題を教員がどのように解決して授業デザインを行ったのかを，担当教員である筆者自身の戸惑いや不安をも含めて，記述することである。

## 1．本稿の対象授業とCOVID-19のためのオンライン授業について

本稿の対象授業は，青山学院女子短期大学子ども学科の3年間の学びの次に設置されている1年制の専攻科の選択必修科目「身体表現特別演習」である。授業担当者は筆者である。本授業は同短期大学本科3年次の「子どもと表現」を更に発展させた授業となっている。「子どもと表現」の授業では，子どもの表現が遊びや生活の中で育まれていくことを学ぶ。そして子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにすることをめざす，領域「表現」への理解を促し，それらを適切に指導・評価する力を育成し，乳幼児期の保育を担う専門家としての資質・能力を高めていくことを目

的としている。

そして本稿の対象授業である専攻科の「身体表現特別演習」では，表現領域を理解した上で実践していく力をつけるための「模擬保育」を実施する。本授業で行う模擬保育は「ワークショップフェスティバル」と呼ばれ，身体表現領域のダンスや音楽に加え美術や空間的な表現，演劇や言葉あそびなどの言語的表現を網羅し，学生自身が企画立案，実践，及び作品制作を行うことになっている。しかし2020年は，COVID-19のためにこれら全てをオンラインで行うことになった。

## 2. 世界の舞台芸術界におけるオンラインでの新しい挑戦

学生たちとオンラインによる表現ワークショップを企画・実践していくにあたり参照したのが，世界の舞台芸術界におけるオンラインでの新たな挑戦である。世界に蔓延した未曾有のCOVID-19のために，舞台芸術界では演劇やコンサートの公演中止や延期が相次だ。日本のみならず世界中の劇場が閉じてしまい，危機的状況が続いている。そうした中，国内の劇場や芸術団体は連帯を組み，緻密な情報交換を行いながら，安全な劇場の再開に向けての行動をし，新しい挑戦が続いている。演出家の佐藤信は神奈川新聞のインタビュー[1]において次のようにコメントしている。半世紀に渡り日本の演劇界を牽引してきた演出家の言葉は，あとに続く者に勇気を与え，その背中を押し続けている。

> 疲弊した心にエネルギーを与えるのが芸能。世界中の面白い演劇は常に困難から生まれている。人々に余裕がない時こそ，何を表現すべきか考えるのがアーティストの務めです。（中略）文化芸術は新たな形として進んでいく。困難をどれだけ創造性に昇華できるか。それを考えるのがこの仕事の醍醐味でもあり，表現者として自覚しなければならないことです。

実際，世界中のアーティストたちはCOVID-19のための「Stay Home」の間，様々なオンラインでの芸術的な取り組みを見せた。例えばジャズピアニストの小曽根真は妻で俳優の神野三鈴と共に，自宅のリビングルームからのライブコンサートを緊急事態宣言下に連続53日間，世界最大のソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）であるFacebookにて無料で生配信した。筆者を含むファンは毎晩21時になるとFacebookに集い，小曽根のファンからのリクエストに応えながらの素晴らしい演奏を楽しんだ。そしてオンライン上に生まれる小曽根とファンとの，小曽根と他の演奏家との，そしてファン同士の交流をも楽しんだ。それらの交流から不思議と自宅に独りでいても，決してこの世界に独りではないという喜びと勇気とを感じることができた。

英国の作曲家アンドリュー・ロイド・ウェバー（Andrew Lloyd Webber）は2020年に新作ミュージカル『シンデレラ（Cinderella)』の開幕を予定していたが延期となっている。併せてCOVID-19のために，『オペラ座の怪人（The Phantom of the Opera)』などロイド・

ウェバーの人気ミュージカルは全て上演中止になっている。そんなロイド・ウェバーもいち早くTwitterなどのSNSを使って自らのメッセージを直接ミュージカルファンに発信した。そして自身が権利を持っている『キャッツ（Cats)』や『ジーザス・クライスト・スーパースター（Jesus Christ Superstar)』などの映像作品を，週替わりで世界最大の動画共有サービスYouTubeにて全世界に無料配信した。その他にも，英国のロイヤルナショナルシアター（Royal National Theater）やロイヤルオペラハウス（Royal Opera Houce)，仏国のパリ・オペラ座バレエ団（Ballet de l'Opera national de Paris)，米国のメトロポリタン歌劇場（Metropolitan Opera House）などを持つ総合芸術施設リンカーンセンター（Lincoln Center for the Performing Arts）など，世界の多くの劇場でもその劇場が所有する貴重な映像化された舞台作品をオンラインで無料配信している。世界中の舞台芸術ファンは自宅にいながらにして海外の舞台作品を観ることができた。

BATS（Bay Area Theatersports）は米国サンフランシスコにあるインプロ（即興演劇）専門の劇場であり，世界的に評価の高いインプロ劇団である。インプロとは即興演劇のことで，脚本も，設定も，役も何も決まっていない中で，その場で出てきたアイディアを受け入れ合いふくらましながら，物語をつくり場面を演じながらシーンをつくっていく演劇のことである[2]。BATSがあるカリフォルニア州ではCOVID-19の感染拡大は大きく，それを抑え込むためにかなり厳しい外出禁止令が出された。それに伴い，BATSは劇場でのインプロ公演やワークショップを全て中止としたが，すぐにWeb会議サービスのZoomビデオコミュニケーションズ（Zoom）を使ったオンラインでのインプロショーを世界に向けて発信することに切り替えた。2020年3月最初のオンライン・インプロショーでは，プレイヤー同士のコミュニケーション不足があったり，バーチャル背景の扱いに慣れないプレイヤーによるハプニングがかなりあった。サスペンス作品では最後の犯人がわかるという場面は重要であるが，バーチャル背景に犯人役のプレイヤーが埋もれ見えなくなってしまうという失敗があり，生配信でみている（筆者を含む）ファンたちを大笑いさせたこともあった。しかし即興で演劇をしているインプロには失敗はつきもので，オンラインであってもBATSの俳優たちの挑戦を生配信で目撃できることはファンにとって堪らなく嬉しいことであった。更にBATSでは所属するプレイヤーたちがインプロを教えるワークショップをオンラインでスタートさせ，世界中どこからでも自宅にいながらにして質の高いワークショップを受けられるようになった。

## 3. オンライン授業実施への不安（2020年3月中旬）

2020年3月中旬，いよいよ筆者も本格的に「身体表現特別演習」のオンライン授業準備をしなくてはならなくなった。世界中の劇場やアーティストが自身の作品を無料配信していることから，学生がインターネットを通じて質の高い作品を鑑賞してそこから学べることはあるだろうとはわかっていた。しかしそれでは一方向的な，学生が受け身の姿勢になってしまうかもしれないということを懸念した。これから保育者として活躍していく学生たちには，オンラインであっても授業に主体的に参加し，自ら考え表現できる，仲間とコミュニケーションを取りな

がら学ぶことが可能となる授業デザインを行いたかった。

しかし，筆者はまずオンライン授業に対して，配信などの技術的なことへの不安が高まっていた。筆者はツイッターやFacebookなどのSNSは利用しているものの，Cisco WebexやZoomなどのWeb会議システムなどのオンラインでのコミュニケーションツールを使用したことがなかったためそれをどこで学べばいいのかわからず途方にくれ，不安で動けなくなった。学生も，オンラインで身体表現の授業などできるわけがないと思った学生が多かったようだ。また学生の中には人前で表現することは苦手だと思っていたり，身体表現をオンラインでやるなんて不可能であると思っていた者もいたようだ。本授業は必ずしも受講する必要のない「選択必修」であるため，オンラインによる身体表現の授業を履修するかどうか非常に迷った学生もいたようだ。

## 4. インプロ仲間とのオンライン・インプロ勉強会（2020年3月28日）

筆者は2009年から東京学芸大学准教授の高尾隆に師事し，演劇教育やインプロ（即興演劇）の実践研究に取り組んできた。現在でも高尾の師であるキース・ジョンストン（Keith Johnstone）のインプロを中心に仲間と共に学び，時には前述のBATSのインプロプレイヤーたちからも学びながら，インプロショーの舞台にも立っている。近年ではジョンストンが考案した3つの対戦型インプロショーのうちの1つ『ゴリラシアター』の上演権を取得し，2020年6月の劇場公演を目指していたが，COVID-19のために上演を延期している。また2020年3月に予定していた高尾門下の同窓会的なインプロ合宿もCOVID-19のために中止にした。

楽しみにしていたインプロ公演や師や友と一緒の合宿ができない悔しさや，どのように実施すればよいのかまるでわからないオンライン授業の準備も進めなくてはならない苦しさを，筆者は仲間たちに吐露した。そして「オンライン授業の勉強会を一緒にしないか？」と声をかけた。インプロ仲間には筆者のように大学や小学校，高校などで教えている教師たちがいた。私立小学校で教えている教員はすでにZoomやGoogleなど，遠隔にいる子ども達とオンラインでコミュニケーションが取れるツールを使いこなしていた。習い事としてのインプロを子どもたちに教えている者もいた。ホームページのデザイナーなどオンラインの技術的なことに詳しい者もいた。すぐに20名もの賛同者が集まり，インプロをオンラインで試してみる実験的な勉強会をZoomにて開催することになった。

2020年3月28日の勉強会当日，20名の参加者の中からファシリテーター（進行役）を望んだ筆者を含む6名が20分ずつ担当し，インプロゲームやオンラインでできる実験的な表現遊びを提案していった。参加メンバーは気心知れた仲間であり，インプロ経験がある者たちばかりだったので，進め方としては，ウォーミングアップやアイスブレイクなど導入から入るワークショップの流れは気にせず，ファシリテーターが実験してみたいことを次々にやっていく方式にした。また，BATS Improvがオンライン・インプロショーをZoomで実施したことを参考にして，技術的な工夫を実際に試していくこともした。

Zoomの機能については「ビデオ参加者以外は非表示」という，参加者全員の姿やアイコンを消して見やすくする機能については皆で最初に設定した以外は，「ブレイクアウトルーム

(参加者を別々の部屋に分けて話ができる機能)」や「画面共有（資料や動画などを参加者みなで同時に観ることができる機能)」などのやり方はインプロをやっていきながら理解していくことにした。また，この勉強会のあとに，BATSがオンライン・インプロショーで使っていたZoomの「ウェビナー機能」を試す時間も設けた。ウェビナーとはホストと視聴者たちという関係で比較的大人数の講演会などに使える機能である。

○勉強会で実施したインプロワークショップの内容は，以下の通りである。
・ワンワード：一人一言ずつ言葉を言い，それをつなげて1本のストーリーにしていく。
・アテレコ：動画を見ながら声の吹き替えをしてみる。
・ビデオレター：亡くなった母親が残したビデオレターを子どもたちが観る。
・私は木です：最初の人が身体で木を表現すると，次の人が木のそばにありそうなものになって登場して，次の人がまた別のものになって登場する。
・ぬいぐるみ：参加者各自が自宅からぬいぐるみを1体さがして持ってくる。ぬいぐるみが喋るとしたらどんな声かをみつけ，ぬいぐるみを動かしながらごっこ遊びをする。
・モノの名前を言う：自分の周りにあるものを次々に指さしながら言っていく。
・セリフ大喜利：Zoomの画面共有機能を使って，見せられた写真で大喜利をする。
・画面共有でインプロシーン：画面共有された写真を見て，そこからシーンを演じる。
・音声のみのWhat comes next：ビデオを消して音声のみで，物語を紡いでいく。

6人のファシリテーターと15名の参加者は，いつもやっているインプロワークショップをいつものように楽しみ，初めてのオンライン・インプロワークショップにおいて，出来ることと出来ないことを確認しあいながら，予定時間をはるかに超えて勉強会を終えた。参加した誰もがオンライン・インプロワークショップに関して手ごたえを感じ，その中のメンバー3人が発起人となり，オンライン・インプロショーをこの勉強会の一週間後に行うことにした。

## 5. オンライン・インプロショー『Impro at Home』稽古（2020年4月3日）

インプロワークショップ勉強会を経て，筆者らはZoomを使ってオンラインにて一般の客に観ていただけるインプロショーを企画した。出演者は全員，自宅からインプロショーに参加した。客は同じく自宅からオンラインでショーを見る。そのようなオンラインでのインプロショーが観てくださる方々にも出演するプレイヤーにとっても「アットホーム」な時間になればと願いこのショーのタイトルを『Impro at Home』と名付けた。

オンライン・インプロショーを前に4月3日にショーの稽古日を設けた。東京，群馬，名古屋，三重，プレイヤーたちは日本各地の自宅から参加した。その距離や仕事や子育て中の生活であることなどを軽く超えて，オンラインツールを使いこなすための勉強会から派生したインプロショーではあったが，「新しいおもちゃ」で遊ぶことはとても楽しかった。気心知れた同窓生たちとインターネットを通じて集いインプロができたことは，コロナ禍とはいえ，筆者は

ワクワクした嬉しい気持ちに溢れていた。

## 6. オンライン・インプロショー『Impro at Home』本番（2020年4月3日）

オンライン・インプロショー『Impro at Home』はZoomのウェビナー機能を使って100名の客に観ていただく準備をし，更にFacebookと同期して，そちらでは人数制限なしで観ていただける予定であった。日本初のオンライン・インプロショーということで多くの方々からの注目を集め，本番開始前にZoomへのアクセスは定員の100名を超えた。Zoomに入れなかった方々にはFacebook Liveでの中継を見ていただく予定であったが，残念なことにFacebookとの同期がうまくいかず多くの方々にオンラインショーを観ていただくことができかった。プレイヤーのうちの何人かは，観ることができない客とのやりとりをSNS等でさせていただきながらのインプロショー出演となった。

Zoomでのインプロショー開催に関しては，機材トラブルや，「荒らし」と呼ばれる第三者による妨害行為の心配もあったため，早めの接続チェックや荒らし対策として客側に知り合いを配置するなどの工夫もした。また筆者の場合は，高齢の母親やオンラインとは無縁の生活をしているきょうだいと同居していたため，自室でパソコンに向かって大きな声をだしたり笑ったりしている筆者のことを，まるで理解してくれない家族がいた。生後6か月の子どもを抱えながら出演した仲間もいた。しかし私たちが取り組んでいるのは，即興で行うインプロである。オンライン・インプロショー本番の画面にそんな家族が乱入してきたり，機材トラブルなどが起きてしまったとしても，「そのハプニングをも楽しんでいきましょう！」と，出演者同士で声をかけあった。

○オンライン・インプロショー『Impro at Home』の演目は以下の通りである。

・ワンワードなんでも博士：数人のひとり一言ずつだけ語っていき，客の質問に答える。
・NGワード：事前に決めたNGワードがシーンの中に出てきたらアウトになる。
・台風中継：台風中継を，家にある小道具（ビニール傘，ドライアー）を使って演じる。
・アテレコ：声をださずに口だけ動かす人がいてその動きに声をあててシーンを演じる。
・What comes next：物語を先に進めるためのジョンストンのインプロゲーム。
・ジブリッシュ：でたらめ語を使って詩の朗読を行い，その翻訳者が日本語で語る。
・イルカの調教ゲーム：ひとりがイルカ役になる。イルカにやってほしいことを皆で決めるが，言葉で伝えることはできない。イルカがそれに近づいたときに「リン」と伝えることだけができる。
・主人と召使：主人と召使のシーンを2人のプレイヤーが演じる。
・解決社長：社員が会社で起きた難題を社長に伝えるが，社長はなんでも解決できる。
・ふくろうとのシーン：ぬいぐるみを使ったシーンを演じる。
・アフタートーク：インプロショーが閉幕したあとに，観客とプレイヤーとが交流をする時間。観客からの質問にプレイヤーが応えていく。

オンラインでインプロショーを実施するには，機材などの技術的な準備や工夫が必要となる。また，映画やドラマなどの映像表現から学ぶ必要性を感じた。更にオンラインではカメラを通して相手の状態などの空気感が伝わりにくく，そこを想像しながらの演技が求められることもあった。音声が少し遅れて届くという問題もあり，同じステージに立っていないことを補っていく難しさがあった。しかし何よりも，気心知れた同窓生がオンラインではあるけれど集まって，まだ日本で誰もやっていないことオンラインでのインプロショーにチャレンジしていく過程は，自分たちのチャレンジ精神を十分に発揮させることができた実にやりがいのあるイベントであった。参加したメンバーたちはその後，未曾有のパンデミックの中，それぞれの現場に戻り，自分の表現活動や教員としての仕事を遂行していくことになる。

## 7．Zoomによる「身体表現特別演習」の初回授業（2020年5月13日）

仲間と共に行った，オンライン・インプロの勉強会及びオンライン・インプロショーを経て，筆者はいよいよ2020年4月から，青山学院女子短期大学子ども学科専攻科の選択必修授業「身体表現特別演習」のオンライン授業をスタートさせた。4月の2回の授業では，3年次の「子どもと表現」の復習と，YouTubeに正式に公開されているダンスの動画を鑑賞してレポートを書く課題に取り組んだ。

そして，5月13日からはZoomの同期型のオンライン授業をスタートさせた。オンライン授業には大きく分けて2種類の形式がある。ひとつは非同期型オンライン授業（オンデマンド授業）である。教員がスライドや音声，動画などのコンテンツをオンラインで公開し，学生が自分のペースで閲覧・視聴する形式である。もうひとつは同期型オンライン授業（リアルアイムの授業）である。Cisco WebexやZoomなどのWeb会議システムを活用して，教員と学生とがリアルライムで授業に参加する形式である。筆者の同期型初日の授業には専攻科の学生全員が出席した。その数字が見えたときに嬉しくてアナウンスしてしまった。学生たちがとても学びたがっていたことは前2回の提出課題からも伝わってきていた。学生たちは初めからからビデオとマイクをオンにして，授業に積極的に参加しようという姿を見せた。まだカメラを搭載していないパソコンを利用している学生もいたが，彼女は自分のスマートフォンとの2台を駆使して授業に臨むという意欲と工夫をみせていた。

担当教員である筆者も，Zoomのホワイトボードやチャット機能を使って，学生が声だけでなく，文字や絵をかいて表現できるよう工夫した。また，電波の状況から音声が聞き取りにくいことも想定し，教員はスケッチブックに文字を書いて学生に見せることもした。また，外出が制限されていることに加え，閉まっていたり物流制限されている店も多く，学生たちが画用紙や折り紙など授業に必要な教材を容易に手に入れることが難しくなっていたこともあり，筆者は「ワークショップセット」と呼ばれる，教材（画用紙，折り紙，ホワイトボード，ペン，風船，シール，モール，紐，等）を履修学生全員に郵送していた。どの学生も授業前にきちんとシート式のホワイトボードを段ボールなどに貼りつけ準備もして，積極的に授業に参加していた。

Zoomを使っての授業の初回では，実践的な遊びでは，簡単な「しりとり」からスタートした。ブレイクアウトセッション機能を使用使って，学生を4～5人の小グループに分けて遊んだ。また，学生が今いる家の中から「ぬいぐるみ」をひとつ持ってきて，ぬいぐるみの声をみつけ，誰かとおしゃべりしてみる人形ごっこ遊びに取り組んだ。これは筆者がインプロのオンライン勉強会で試してみた遊びだった。

授業終わりの学生のコメントは，Zoomのチャット欄に書き込んでもらった。久しぶりに友達の顔が見えたことを喜び，小さなグループに分かれておしゃべりが出来ることを楽しみ，授業で自分のぬいぐるみを使って遊ぶなんて斬新だと感じ，Zoomでここまで遊べることがわかると自分でもオンラインワークショップをつくってみたくなったというコメントがあった。次々に学生のコメントがチャットに書き込まれていくのをリアルタイムに読み，筆者はホワイトボードに「皆さんの感想に勇気づけられます！ありがとう！」と書いて，学生たちに見せた。

## 8. 学生がインプロを体験する（2020年5月20日）

次週の授業で予定している「インプロゼミ」の4名によるオンライン・インプロショーの観劇会を前にして，この日は学生自身にインプロを体験してほしく，43名の学生を誕生月で3グループに分けての授業をZoomにて実施した。すでに3年次に何度かインプロゲームを経験している学生たちであったが，改めてインプロショーを観る前に自分でやってみるインプロの体験をしてほしかった。

ウォーミングアップに出来るようにと，学生たちに「なぞなぞを2つ」用意してくることを課題としていた。学生は出題者になり，他の学生は回答者になってホワイトボードになぞなぞの答えを書いていった。実際には近くにいない友の前に画面越しに立ち，それでもしっかり出題していく学生たちはもう「先生」の顔つきであると，筆者は彼女たちを頼もしく感じながら見ていた。

Zoomの「ビデオ以外の参加者を非表示」機能を使って，カテゴリーゲームを行った。「猫が好きな人！」と出題者がいうと，猫が好きではない人がビデオをオフにして皆の前から姿を消し，猫が好きな人だけが画面上に残るというものである。それに対抗して「犬が好きな人！」の出題を聞き，自宅で飼っている愛犬を抱いてきて皆に見せている学生がひとりではなく，可愛い犬たちの登場にみな大喜びであった。また「5月生まれの人―」という出題では「私，今日が誕生日なんです」と伝えてきた学生がいて，みなでハッピバースデーの歌を歌い（Zoomなので音が遅れて届くために）バッラバラになってしまったが，その温かい歌声に，誕生日の学生は嬉しそうだった。

## 9.『青短インプロショー』稽古（2020年5月23日）

筆者を含む「インプロゼミ」のメンバー4名で，「青短インプロショー」という，オンライ

ン・インプロショーを「身体表現特別演習」の授業内で実施することにした。うつみくん，りな，こうだい，れいこ（筆者）の4人は，インプロの父と呼ばれるジョンストンが考案した『ゴリラシアター』の上演権を獲得している。それぞれが自分の主催するインプロや演劇団体を主宰し，インプロを教たり舞台にも立っている。ジョンストンのフォーマットのうち，マエストロとシアタースポーツはオンラインでのショーが上演されているが，『ゴリラシアター』に関しては，オフラインのステージで演じられるのがふさわしいであろうという筆者たちは判断し『ゴリラシアター』の上演はCOVID-19が終息するまで延期している。『ゴリラシアター』はディレクター対決形式のショーである。そのシーンの責任を取るディレクターがシーンのクオリティを担保する。プレイヤーはより自由にインプロを楽しむことができる。そして何より特徴的なのは着ぐるみを着たゴリラが登場する。ゴリラはこのショーではとても重要な役割を担う。

今回の『青短インプロショー』では4人のプレイヤーがディレクター対決をするという形でオンライン公演を行うことになった。ひとりずつディレクターとして登場し他のプレイヤーのインプロのシーンを演出していく。観客である学生は，今の演出が良かったと思ったら，Zoomの投票機能を使って1票を投じていく。ジョンストンは対戦形式のインプロフォーマットをいくつかつくっているが，プレイヤー同士が本気で戦いあうことは望んでいない。ジョンストンはプロレスを見ていてシアタースポーツを考案したと言っている。プロレスでは，ヒーローも悪役レスラーもジャッジもみなひとつのファミリーであり，ひとつのショーとして観客とプレイヤーとの関係をよくしていくために悪役レフリーが機能していることなどから，対戦形式のインプロフォーマットをいくつも開発している。

ディレクターは観客である学生たちからインプロシーンに必要な場所や関係性などのアイディアをもらうことができる。平常であれば客席にいる客と直接話をしながらアイディアをもらえるのだが，今回はZoomのチャット機能を使って，学生たちは自分が思いついたことを書き込んでいった。筆者らは，学生とディレクターとプレイヤーとが，共にオンライン・インプロショーをつくりあげていけるフォーマットを採用し，準備を重ねた。筆者はこれまで一緒に学びを重ねてきた，この魅力的な「インプロゼミ」の仲間をオンラインではあるが，学生たちに出合わせたかったのだとも強く思っている。

## 10.『青短インプロショー』本番（2020年5月27日）

この日の授業では『青短インプロショー』を実施した。学生はこの日，いつものミーティング機能ではなくウェビナー機能を使って用意されたURLにアクセスをしてZoomに入室し，オンライン・インプロショーの観客になった。本授業の担当教員である筆者がショーの総合司会を担当した。平静を装っていてもその緊張は学生に伝わったようで，観客が自由にコメントを書き込めるチャットからすぐさま「せんせい，がんばれ！」のメッセージが飛んできた。

ショーは4人のディレクター兼プレイヤーによる，ディレクション（演出）対決のショーであった。プレイヤーとしての筆者には「ひとりで歌え」「最高のプロポーズのシーン」「自転車

に乗って」など，かなり無茶な注文がきたが，必死にそれらに応えていった。そして自身も仲間たちにインプロのディレクションをしていった。あっという間に時がたち，気が付くと，筆者が優勝していた。ジョンストンはインプロの舞台の上で本当に戦ってはいけないと言う。もちろんそれは手を抜いてわざと負けろという意味ではない。客とディレクターとプレイヤーとの間で，自然に今日のショーの主役が誰かが見えてくる。インプロゼミの仲間たちは，ここの教員である筆者を活躍させるべく，とにかく筆者を輝かせるためのディレクションをかけてきたのだ。そして相手を輝かすことができる人は，客席から見るとその人こそが素敵に輝いて見えるということを，学生たちにインプロを通して伝えることができた。

## おわりに

本稿の目的は，保育者養成校における表現領域の授業のオンライン化によって生じた課題を教員がどのように解決して授業デザインを行っていったのかを，担当教員である筆者自身の戸惑いや不安をも含めて，記述することであった。オンラインでの授業デザインは教員自身が仲間と共に学び経験したインプロの実践が大きな支えとなった。ジョンストンのインプロのコンテンツには，表現領域の授業がたとえオンライン化されたとしても我々が表現することを探究し続けたくなる魅力であふれている。そして筆者がインプロゼミの仲間と共にオンラインでのインプロの実践を試行錯誤を繰り返しながら楽しみながら経験し学んだことを授業デザインへとつなげたように，学生たちもZoomで遊びながらその機能を知って使いこなし，仲間と一緒に主体的に授業に取り組み，授業後半で実施した「模擬保育」の保育デザインへとつなげることができた。彼女たちが将来，新しい時代の保育界のリーダーとなって活躍する日が来ることを信じている。

しかし本稿では，授業デザインの中でも特に計画段階に着目しての記述に留まっている。実際のオンライン授業の中で何が起きて学生たちがどのように学んだのかまでは考察できていない。表現領域におけるオンライン授業の授業デザインについて引き続き実践と研究を続けていきたい。

## 謝辞

未曾有のコロナ禍にあって，オンラインによる「身体表現特別演習」の授業を教員と共につくりあげ，真摯に学びに向かっていた青山学院女子短期大学専攻科43名の学生さんに心から感謝申し上げます。また，未知のオンライン授業を実施していくにあたり，様々な専門分野の知識や技術，そしてインプロへの情熱を総動員しながら，共に実験的な新しいオンライン・インプロワークショップ及びオンライン・インプロショーをつくりあげていってくれた，「インプロゼミ」の仲間，うつみくん，もっちー，りな，こうだい，あゆみ，いぬちゃん，おちゃこ，けんもつ，そのべ，なつみ，ハル，りお，ベルベる☆，ぐんじに，心から感謝申し上げます。

**註**

1　神奈川新聞芸能欄「半世紀演劇界けん引の演出家　コロナ禍に思う文化芸術とは」2020年6月5日朝刊

2　高尾隆・中原淳『インプロする組織　予定調和を超え，日常を揺さぶる』

**〈参考文献〉**

高尾隆『インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか？』フィルムアート社，2006年

Johnstone, Keith. “Impro for Storytellers” Routledge, 1999.

Cameron, David. Anderson, Michael. “Drama and Digital Arts Cultures” Bloomsbury, 2018.

# Design of an Online Classroom for Expression in the Department of Early Childhood Education: Learning from the practice of Impro (improvisational theatre)

NAOI Reiko

The purpose of this paper is to describe how a faculty member resolved issues that arose from online teaching of the expression domain in the Department of Early Childhood Education and how they designed the class. The description includes a detailed description of the teacher's confusion and anxiety.

The online lesson design was supported by Impro (improvisational theater) practice that the teachers themselves learned and experienced with their peers. The teacher and his fellow improvisers had a lot of fun with the online improvisation practices, and they were able to use what they learned to design the classes. Similarly, the students of the Department of Early Childhood Education were able to learn about the functions of Zoom while using it, and they were able to work independently with their peers on the class, which led to the design of a "simulated childcare and education" lesson in the second half of the class.

Keywords: Impro (improvisational theatre), online teaching, expression, lesson design